

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

いつかも書いたことがあるが、人間はまず自分の好きなことをすることが大切である。好きと感じることを行なううちに、新しい世界が広がってくる。と言っても、好きなことをするのは近所迷惑なことも多い。そこで、近所迷惑をあまりにも恐れることになる、結局のところ、何も出来なくなる。近所迷惑のことも自覚しつつ、それでも好きなことをやっていくところに、人生の面白味が出てくるものである。

好きなこととして、「善行」をしたい人たちがいる。この人たちの一番困ることは、何しろ善いことをしていると思っているため、近所迷惑についての自覚が薄いことである。

一例をあげてみると、老人ホームにやってくるボランティアの人が居る。やってくると、老人にやたらに親切にする。老人の方もやはり誰かに甘えてみたいものだから、何やかや要求する。それに応じていると、老人も嬉しくなって、平素は出来ないことまでする。これは確かに素晴らしいことである。しかも、このような行為を、この人は無償でやっているのだから、ますますそれは「善行」と言うべきである。

しかし、こんな人が時たま来てくれると、施設の人たちが後で苦労することになる。甘えることの味を覚えた老人は、次の日になると、今まで自分でしていたことまでしなくなって、他人に頼ろうとする。施設にいる人たちは、それにいちいち応じて居られないし、やはり老人と言っても出来る限りは自立的に生きて欲しいものだ。

時には、この老人が、ボランティアの誰それさんは優しい人だけど、ここの施設の人は冷たい人ばかりだ、などと言いだすかも知れない。こうなると施設の人は面白くない。そこで、ボランティアの人が次に来たときは、あまり歓迎しない。そこで、「あれっ」と気がついて施設の人と話し合うようなボランティアは、本当に素晴らしい人だ。しかし、一般に「善人」は他人の気持にノーマークの人が多いので、そのまま平気でやってくる。と言っても、ものごとには限度があつて、施設側から急に来所を拒まれたり、板ばさみになってきた老人が急に不愛想になってきたり、とかの破局を迎える。

こんなときに、せっかく善意で行ってやっているのに何だあの施設は、というので、そこをやめて、他の所にボランティアに行く、というような渡り鳥的善行を繰り返している人もある。

しかし、本当に善を行ないたいのだったら、「微に入り細にわたって行なわねばならない」のである。施設の人の不機嫌を感じとったら、それについて考えてみる必要がある。老人が、あれをして欲しいこれをして欲しいと言ったとき、それにすぐ応じることが、本当に意味のあることかと考えてみる必要がある。それらのことをひとつひとつ取りあげ、考えてゆかないと、善が善にならないどころか、有害なことにさえなってくる。

そこで、頭書のような言葉が大切となるのだが、実は、これはウィリアム・ブレイクの「他者に善をおこなわんとする者は、微に入り細にわたっておこなわなければならない」という言葉を短かく言い直したものである。

いわゆる先進国の対外援助の実態などを見ると、この言葉の重要性を痛感させられる。沢山の金を使って、いろいろな物を送りこむのだが、それによって、その国は果たして「豊か」になるのだろうか。本来はその国に無かった物を急激に大量に送り込むによって、その文化のもって

いる基本的パターンを壊すようなことをしていいのだろうか。それは武器による侵略と類似のこととさえ言えそうに思われる。

微に入り細にわたるような面倒なことはしたくない。ともかく善意でやっているのだから、と言う人は、それは自分が好きでやっているだけのことで、賞賛に値しないどころか、極めて近所迷惑なことをしているのだ、という自覚ぐらいは持つて欲しいと思う。ボランティア活動というのは、余程気をつけてやらないと、逆効果を生ぜしめたりするものなのである。

それが嫌な人は、微に入り細にわたってやって頂きたい。一旦それをはじめると、善を行なうことがどんなに難しいことであるかがわかることであろう。自分では善と思っても、本当はどうなのかはわからないと思えてくる。そうなつてくると、善人に共通する不愉快な傲慢さが少しずつ消えてくる。善とか悪とかいうことよりも、自分の好きなことをさせて頂いている、ということが実感されてくる。「神は細部に宿り給う」というワールブルクの言葉も、こんなことに関連しているのだろう。

河合隼雄『こころの処方箋』（新潮社、一九九二年）

問 この文章を読んで「ボランティア活動」について、あなたはどのように考えますか。まず、この文章の著者の考えを簡潔にまとめたいので、あなたの考えを述べなさい。ただし、自分の考えを述べる際には、理由についても書きなさい。字数は、六〇〇字程度（五五〇～七〇〇字）とします。